

「武道推進モデル校」事業を活用した 複数種目（剣道・弓道）の実践

宮崎県串間市立串間中学校
教諭 尾崎城夫

本校は、令和元年度、スポーツ庁より「武道等指導充実・資質向上支援事業」の委託を受け、複数武道種目授業として従前の剣道に加え、部活動としても活動している弓道を実施した。地域の指導者を活用することに焦点をあて、保健体育科教員の指導力向上だけでなく、武道の魅力を伝え、地域の武道振興に寄与できると考え、剣道・弓道の実践に取り組んだ。

今号では、本校での実践内容や今後の方針などを紹介したい。



串間中の校舎

1 学校の概要

串間市は宮崎県最南端に位置し、人口1万7千人余りの小規模都市である。市内には都井岬^{とみみさき}、幸島^{しあま}、恋ヶ浦海岸などの観光地があり、緑あふれる木々や透き通るような青い海に囲まれた、自然豊かな町である。

串間市立串間中学校は、市内に6校あった中学校（福島・大東・北方・本城・都井・市木）を再編するとともに、宮崎県教育委員会と串間市教育委員会とが協定し、県立福島高等学校との連携型中高一貫教育校として、平成29年度に開校した中学校である。

全校生徒は392名（1年122名、2

年147名、3年123名）で、素直で明るい生徒が多く、豊かな自然に囲まれた環境でのびのびと学校生活を送っている。学校行事や生徒会活動に一生懸命取り組むとともに、部活動においても県大会上位進出や九州・全国大会出場を果たしている。また、串間中学校の総合的な学習の時間と串間市内にある県立福島高校の地域創生学では、発達段階に応じて地域に密着した一貫性のある学習を取り入れるなど、地域教育の核として魅力ある学校教育を展開している。

串間市は、かつて少年剣道チームが全国大会小学生団体の部で優勝するなど、市内に六つの剣道の団体があった。弓道については、串間中学校開校前の旧福島中学校が全国大会で優勝したこともあった。また、中学校から弓道を始めた生徒が、地域の弓道連盟の方々からのご指導をいただきながら力をつけ、毎年県大会では上位進出する強豪校でもある。毎年1月には、宮崎県や鹿児島県のチームが串間の地でのぎを削り合う「南九州串間武道大会」が開催されるなど、武道振興に力を注いでいる。福島高校にも弓道部があり、中高で練習をするなど中高部活動連携にも取り組んでいる。

串間市は、かつて少年剣道チームが全国大会小学生団体の部で優勝するなど、市内に六つの剣道の団体があった。弓道については、串間中学校開校前の旧福島中学校が全国大会で優勝したこともあった。また、中学校から弓道を始めた生徒が、地域の弓道連盟の方々からのご指導をいただきながら力をつけ、毎年県大会では上位進出する強豪校でもある。毎年1月には、宮崎県や鹿児島県のチームが串間の地でのぎを削り合う「南九州串間武道大会」が開催されるなど、武道振興に力を注いでいる。福島高校にも弓道部があり、中高で練習をするなど中高部活動連携にも取り組んでいる。

本校の保健体育科の授業では、1年生の選択種目として、年間8〜10時間剣道を取り入れ実施してきた。授業は剣道専門の保健体育科教員が担ってきたが、学校が保有する剣道具は20組、竹刀が50本程度で、授業をするには十分とは言えない。そこで、剣道具を使わないで実施できる練習方法を取り入れるなど、創意工夫しながら取り組んできた。

このような地域の実情から、「武道等指導充実・資質向上支援事業」の委託を受け、保健体育科授業で行う武道の授業を、地域の指導者を活用して実践することで、指導力向上及び地域の武道振興に繋げられなかったかと考えた。

2 串間市の武道の実情

串間市は、かつて少年剣道チームが全国大会小学生団体の部で優勝するなど、市内に六つの剣道の団体があった。弓道については、串間中学校開校前の旧福島中学校が全国大会で優勝したこともあった。また、中学校から弓道を始めた生徒が、地域の弓道連盟の方々からのご指導をいただきながら力をつけ、毎年県大会では上位進出する強豪校でもある。毎年1月には、宮崎県や鹿児島県のチームが串間の地でのぎを削り合う「南九州串間武道大会」が開催されるなど、武道振興に力を注いでいる。福島高校にも弓道部があり、中高で練習をするなど中高部活動連携にも取り組んでいる。

串間市は、かつて少年剣道チームが全国大会小学生団体の部で優勝するなど、市内に六つの剣道の団体があった。弓道については、串間中学校開校前の旧福島中学校が全国大会で優勝したこともあった。また、中学校から弓道を始めた生徒が、地域の弓道連盟の方々からのご指導をいただきながら力をつけ、毎年県大会では上位進出する強豪校でもある。毎年1月には、宮崎県や鹿児島県のチームが串間の地でのぎを削り合う「南九州串間武道大会」が開催されるなど、武道振興に力を注いでいる。福島高校にも弓道部があり、中高で練習をするなど中高部活動連携にも取り組んでいる。



生徒の前で話をする岩下氏



岩下氏による技術指導

ずに「打つことの面白さ」を味わえる工夫を行う必要があると考えた。

竹刀は全員分確保できたため、単元前半に竹刀を用いての受け方を学習することができた。面打ちは頭上で床面と平行に、胴打ちは竹刀を体の前で垂直に立てて受ける方法を学習することで、生徒全員が1単位時間内で打突の機会を十分に確保することができた。

(3)指導の実際

オリエンテーションでは、プレゼンテーションしながら剣道の歴史等について説明した。単元前半の基本動作習得を目指した学習では、礼法、構え、足さばき、素振りについて、岩下氏から指導をいただいた。ポイントを押さえた丁寧かつ分かりやすい指導は生徒たちを惹きつけ、大変好評であった。また、指導の中で、「基本動作の重要性」を生徒たちへ熱く語っていた。岩下氏の話は、これまでの指導経験からくる大変重みのある言葉であった。

単元中盤では、基本技の習得を行った。授業時数を考え、面打ち、胴打ちを中心に学習し、応じ技では面抜き胴のみとした。面抜き胴を学習させた意図としては、剣道学習の面白さである「隙をとらえる」ということを一番体感できる技であると考えたからである。私自身、これまで剣道の授業を行う際、基本技の習得に時間を費やしてしまい、応じ技を十分に学習せずに試合をさせたところ、「学習した基本技をどの場面で出せばよいかわからない」といった声が数多くあり、剣道の面白さを体感させることができなかったという反省があったからである。

そのため比較的容易に隙を判断でき、打ち込むことができる面抜き胴を習得させることで、剣道の面白さを体感させるきっかけに繋がるのではないかと考えた。最初は、胴打ちへの恐怖心があつた生徒たちであったが、練習を重ねていくうちに、相手の手元が上がる一瞬を狙う様子が見られた。ま

た、打つタイミングを自分なりに考える生徒もいた。

単元後半は、学習した基本動作や基本技の出来栄を見せ合う「審査会」を計画した。この審査会は、学習した技を自分たちで高めたり、高めるために教え合ったりするなど、生徒同士で考えさせるために設定した。また、審査会は岩下氏にも見学してもらい、審査だけでなく、審査会に向けた生徒同士の練習に助言をいただくなど、専門的立場からの指導をいただくことができた。

評価項目については、所作事、基本動作の丁寧さ、技の出来栄えなどの項目を設定し、審査会を行った。剣道は、ただ打てばよいというだけではなく、技の出来栄えも同時に有効打突の判断材料となる。この審査会に向けて、生徒は審査項目を意識した学習活動に取り組むことができた。

(4)生徒の変容

剣道の授業前後に生徒に意識調査を行った。結果は表①の通りで

〈剣道〉単元計画

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
ねらい	基本動作の習得					基本技の習得					
授業展開	ランニング3周、ストレッチ運動										
	本時のめあて確認、授業の説明										
	（オリエンテーション 剣道の歴史・名称等）	・礼法の学習 ・剣道具の着け方、扱い方 ・足さばきの学習 ・素振りの学習 ・受け方の学習				・面打ち ・胴打ち ・面抜き胴			・課題設定 ・審査会に向けた学習		
		足さばきのスキルチェック		素振りのスキルチェック							
		本時の振り返り									

単元を10時間で計画し、前半は基本動作の習得をねらいとし、後半は基本技の習得をねらいとして授業構成を行った。

(2)指導上の課題

授業は宮崎県剣道連盟から派遣された岩下勇次氏、本校保健体育科教員及び剣道の経験がある私の3名で行った。授業を担当した教員に剣道経験はなく、これまでの指導経験にも授業で剣道を取り扱った経験はなかった。そこで、授業では本校教諭が「T1」となり、私が「T2」で指導補助、岩下氏に専門的知識が必要な場面での指導をしてもらうことにした。そして3名で授業の計画を進めていく中で浮き彫りとなった課題が以下の二つである。

一つ目は、剣道具の着脱をいかにスムーズに行うかである。剣道の授業を実施する際に、剣道具の着け方は、多くの指導者が壁にぶつかっているのではないだろうか。ややもすると、剣道具の着け

方・片付けの仕方を覚える頃には、単元が終わってしまったり、1単位時間のほとんどを剣道具の着け方・片付けの仕方に費やしてしまったりと、学習内容までたどり着けないことも起こり得る。とりわけ、胴紐の結び方と、面紐の結び方については覚えるまでに時間がかかる。

そこで剣道具の着脱をスムーズにするため、胴紐の結び方を簡易化(エプロン方式Ⅱ写真①)することとした。面を結ぶ際、面紐がばらばらにならないように、テープを巻くことで、生徒たちがスムーズに剣道具の着脱ができるよう



写真①

にした(写真②)。

従来の胴紐の結び方であれば、垂れ・胴を着ける時間が約5分程度必要だったが、エプロン方式で行うことにより1分弱で着けることができた。面についても、同様に1分弱で着けることができた。また、簡易化することにより練習中に紐がほどけることが少なくなり、安全に活動ができ、運動する時間も十分に確保することができた。

二つ目は、剣道具を着けずに学習するための手立てである。剣道具が20組に対して、受講する生徒は54名だったため、剣道具を使わ



写真②



市弓道連盟の指導者から
道具の扱い方を学ぶ生徒



生徒に分かりやすく説明する江藤氏



貸与品を使用しでの練習



至近距離からの的打ち

市弓道連盟を通じて宮崎県弓道連盟や全日本弓道連盟に協力を要請、弓を20張、矢を40本、掛と内掛けを40人分、練習用のゴム弓を30人分貸し出してもらうことができた。練習用のゴム弓と実際の弓道具を交互に使用することで、効果的に学習を進めることができた。

二つ目は、指導体制の整備である。江藤氏と私の2名で40名を指導することは困難と考え、より充実した授業を展開するため、専門的知識をもった指導者を派遣してもらうよう串間市弓道連盟に依頼した。その結果、常時2、3名の講師を派遣していただき、充実した指導体制での授業を実現することができた。女性指導者も常時参加することで、男女ともに十分な指導が可能となった。

(3)指導の実際

オリエンテーションでは、プレゼンテーションやDVD視聴、全日本弓道連盟から貸与された指導書と資料を活用しながら、基本的

用語の指導を行い、弓道の歴史や、「射法八節」についての理解を深めることができた。指導書はイラストが多く、弓道を初めて経験する中学生にとっても大変分かりやすい資料であった。

単元中盤は、射形を覚える内容を中心に行った。実際に矢を射るためには、正しい射形を身に付けることが大変重要であった。また、射るだけではなく、的に刺さる体験もしてほしいという願いから、時間をかけて射形を磨くこととした。3時間目から6時間目の学習は、同じような学習の繰り返しであったが、生徒たちも一生懸命に取り組んだ。

単元後半には、至近距離からの的打ちを行った。江藤氏の模範演技を生徒たちは興味深くに見学し、実際に的を射ると「おお」と歓声を上げるほどだった。実際に射る練習に入ると、これまで学習してきた射法八節の動きが上手にいかなくなったり、実際に矢を準備して射ると矢を握れなかつ

表① 〈剣道〉生徒への意識調査

(授業前に実施)			(授業後に実施)		
	「はい」と答えた生徒	「いいえ」と答えた生徒		「はい」と答えた生徒	「いいえ」と答えた生徒
剣道に興味がある	20名	33名	剣道に興味がある	40名	13名
剣道を見たことがある	12名	41名	剣道は楽しかった	32名	21名
試合をしてみたい	35名	18名	試合をしてみたい	45名	8名
剣道は怖そう	22名	31名	もっとやってみたい	30名	23名

(対象・1年男子53名)

の試合形式練習は行わなかった。そのため、授業後に「試合をしてみたい」と回答した生徒が多くおり、授業後に剣道への関心が高くなっていることがうかがえる。

一方で、「もっとやってみたい」と答えた生徒が30名と、生徒の意欲の高まりはもう一歩という感じが残った。このことは、防具を着けるなど準備時間が必要だったことから、運動する時間が他の競技よりも少なかったことや、剣道具を毎回着けることがなかったことなども要因と考えられる。また、試合形式の練習をしなかったことが、男子生徒の心を揺さぶるまでには至らなかった要因の一つでもあったと考えられる。

しかし、岩下氏の指導を受ける生徒は目を輝かせて聞き入っていた。本校教員は剣道に対する知識や指導歴が少なかったため、岩下氏から専門的な話を聞くことができ、指導の幅を広げるきっかけとなった。

〈弓道〉単元計画

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ねらい	基本動作の習得									
授業展開	ランニング3周、ストレッチ運動									
	本時のめあて確認、授業の説明									
	・オリエンテーション ・弓道の歴史 ・弓具の名称 ・用具の扱い方	・所作事の学習 ・ゴム弓を活用しての素引きの練習	・引分け、会、離れの学習	・射法八節の学習 ・至近距離からの的打ち	・的打ち体験 ・審査会					
	本時の振り返り									

単元を10時間で計画し、基本動作の習得を大きなねらいとして授業構成を行った。また、江藤氏との打ち合わせをもとに、2時間続けての学習を5回行った。

(2)指導上の課題

授業は串間市弓道連盟から派遣された江藤公雄氏と私の2名で行った。私自身に弓道経験がないため、授業の大部分を江藤氏にお願いした。また、本校には弓道場が整備されているものの、一度に10人しか構えることができないため、体育館で行うことにした。ここでも、授業の計画を進めていく中で浮き彫りとなった課題が以下の二つである。

一つ目は、弓道具についてである。本単元は、第3学年を対象に行い、かつ、選択制としていた。事前のアンケートでは希望者が20名程度であったが、実際に選択してみると40名の生徒が弓道に興味を示したため、道具が不足することになった。

そこで、江藤氏が所属する串間

4

弓道の授業実践（3学年）



引分けの練習

前述のように、私自身が剣道の動きを習得してきた過程で「反復訓練」は当たり前のことであり、授業でもそのまま実践していた経験がある。しかし、保健体育科の目標でもある「運動に親しむ資質や能力を育てる」という視点を考えると、生徒たちが「武道をや

って楽しかった」「武道をまたやってみよう」という気持ちになるために、ゲーム性のある課題を考えたり、単元の早い段階からかけひきを楽しむ展開を考えたりする必要があるのでないだろうか。今後も絶えず研究を続けていきたい。

また、武道指導という「専門性の高い運動」を学習し、生徒たちに質の高い「確かな学び」を残すためにも、今回のような地域の指導者の活用が全国各地で積極的に行われることを期待したい。

令和2年9月1日に、文部科学省は休日の部活動を従来の学校主体から地域主体にいくことを柱とした部活動改革案を示した。授業においても地域の人材を積極的に活用することで、地域に開かれた学校づくりを推進していくきっかけにもなるのではないだろうか。生徒の健全育成、人間形成の道としての武道が今後ますます発展するために、現場で力を注いでいきたい。

江藤氏をはじめ、串間市弓道連盟の先生方の丁寧で分かりやすい指導が、少ない授業時数でも成果へと繋がった大きな要因だと感じた。

(4)生徒の変容

弓道の授業前後に生徒に意識調査を行った。結果は表②の通りである。

表② 〈弓道〉生徒への意識調査

(授業前に実施)			(授業後に実施)		
	「はい」と答えた生徒	「いいえ」と答えた生徒		「はい」と答えた生徒	「いいえ」と答えた生徒
弓道に興味がある	40名	0名	弓道に興味がある	40名	0名
弓道を見たことがある	38名	2名	弓道は楽しかった	37名	3名
矢を放ってみたい	40名	0名	的に打ってみたい	31名	9名
弓道は怖そう	10名	30名	高校でもやってみたい	6名	34名

(対象・3年男女40名)

授業は第3学年の男女40名(男子11名、女子29名)で行った。男子よりも女子の関心が高かったことが分かる。

「弓道に興味がある」との問いには、生徒全員が「ある」と答えた。

5 終わりに

「弓道は楽しかった」と答えた生徒は40名中37名と、ほとんどの生徒が満足したようだった。わずか10時間という短い授業時数であったが、弓道具をたくさん準備したことにより、全生徒が弓道具を使用した体験的な学習ができたこと、市弓道連盟の支援と丁寧で分かりやすい指導であったことが、結果として「楽しい」という喜びに繋がったと考えられる。

一方で、「高校でもやってみたい」と答えた生徒は40名中6名と非常に少なく、弓道人口増加に繋げることの難しさを感じた。高校で新しいことに挑戦することへの抵抗感があるかもしれないが、武道の魅力に迫る授業展開としては改善の余地があると感じた。

▼今後の課題と展開

令和3年度からは新学習指導要領が完全実施される。新学習指導要領では、武道9種目全てが明記され、武道人口の減少を危惧する武道関係者は大きな期待を寄せていることだろう。古くから日本に伝わり「伝統的運動文化」を会得することができる武道を学校教育に取り入れることは、体力向上のみならず伝統文化の継承、心を育める道徳教育や人間教育にも効果が期待できる。一方で、剣道具を着けてのすり足や踏み込み足といった「非日常的運動」をいかにして生徒たちに伝えていくかということや、技の発生に起こる対人的技能(かけひき)などの「剣道の醍醐味」をいかに生徒に伝えていくかということは、武道経験のない教員にとっては大きな課題であろう。

柔道整復師の国家試験対策予備校

受験生の学習スタイルに合わせたコースをご用意しております。

昼間コース

週6日午前中の通学で徹底対策

夜間コース

週3日夕方からの通学で徹底対策

日曜コース

月2回、日曜日に徹底的に国試対策

通信制コース

通学しなくてもできる国試対策

ジャパン模試

【柔道整復師 国家試験出題基準】に沿った模試問題です。東京・大阪・仙台・名古屋では会場を設けて実施しております。

株式会社ジャパン国試合格

代表取締役 三田 利幸
校長 樗澤 隆治



東京都港区芝浦4丁目12-44 芝浦TMビル7階
JR山手線・京浜東北線『田町駅』下車

TEL : 03-5287-6301
FAX : 03-6809-6670
MAIL : info@jkokushi.jp

<http://www.jkokushi.jp/>
詳しくはこちらから▶

